

更衣記

張 愛玲

(徐 青：訳・解題)

解 題

1942年、22歳の張愛玲は、英文月刊雑誌『二十世紀』*XXth Century* にエッセイ *Chinese Life and Fashions* を発表した。その翌年の1943年12月、雑誌『古今』に改めて、中文「更衣記」と改名して発表し、1945年にエッセイ集『流言』に収録された。全文約五千字にしかない比較的短いエッセイではあるとはいえ、中国服装三百年来的変化についてよくまとめられており、まるで中国服飾変遷史のようにになっている。

『二十世紀』は、ベルリン大学の博士学位をもち、かつてモスクワで新聞記者を勤めたこともある、ドイツ人クラウス・メネート (Klaus Mehnert) が創刊した英文総合雑誌である。彼は1937年から1941年にかけてカリフォルニア大学バークレー校やハワイ大学マノア校で政治学を教えたこともあり、35歳、太平洋戦争勃発の年、開戦6ヶ月前に、歴史と新聞の直観だけを頼りにして上海にやってきて、『二十世紀』を創刊し、自ら主編を担当していた。

1941年10月の創刊号では、上海という地を選んで新しい雑誌を創刊する最も重要な理由として、その頃の上海はすでに国際都市になっていたことをあげている。政治的な面においても上海は、交戦状態にあった世界各国の市民やさまざまな政治団体を受け入れていたクラウスにとって、“平和共存”の特殊な局面において、橋渡し、客観的に分析していく場が必要でした。また、ヨーロッパでの戦争勃発後、ヨーロッパの書物をアジアまで運び出版発行することは殆どできないので、アジアにいる欧米人は精神上の糧を失った。とくに、上海租界にいる外国人は多かったのです、彼には先見の明があったといえる。

一方、張愛玲は、Eileen Chang という英語名で、『二十世紀』(1941年6月号)に *Still Alive*、12月号に *Demons and Fairies* (拙訳「中国人の宗教」『愛知大学国際問題研究所紀要』137号所収)を発表した。

1942年10月号に発表された *Chinese Life and Fashions* は、張愛玲がもともと強烈的な衣服狂 (clothes-crazy) であったことに端を発したエッセイでもある。張愛玲は、5歳の時に父親の妾から薄い紫色のベルベットの中国式短衣と長いスカートをプレゼントされたが、「お母さんと私とはどっちが好き？」と尋ねられた。張愛玲は嘘つくことなく、その妾が好きだと答えた。また、張愛玲はエッセイ「私語」の中で、「8歳の時にはS型髻をしていた、7歳になった時にはもうハイヒールを履いていた」と書いている。張愛玲の心の奥には、ある種の服装に対する強烈的な欲求があったに違わなかった。漫画を上手く描ける張愛玲は、当時上海にあった英文新聞『大美晩報』に投稿し、新聞社から五元の高額料を受け取ったが、彼女はその原稿料を処女作の記念にせず、すぐさまミニのTangee口紅を購入した。母親がヨーロッパから帰ってきた時、騒いで、洒落た小さな赤の服を女中に着せてもらって、母親の帰りを待っていたほどでした。その後、両親が離婚、しばらく、継母の元で共同生活をしていた。その継母の古くなった服を着ていたが、また、叔母からも「筆筒を整理する時きみの従姉妹たちの古い服を探しだしてあげるわよ」、と言われたとたんに、張愛玲の顔は真っ赤となって、涙がこぼれ落ちたということもあった。

のち、香港大学での生活もそれほど楽なものではなかった。香港は日本軍によって18日間包囲された末、1941年12月8日日本軍が上陸した。戦争が一段落ち着くと、張愛玲は友人の炎櫻と一緒に街中にアイスクリームと口紅を探し回った。張愛玲は偶然に広東の田舎の手織り

木綿と出会って、購入した。それは最も目立つ薔薇色の上に赤紫系統のピンクの花と若々しい緑の葉の模様が施されたものでした。また、同じような花模様は、深い紫とビビットな緑の布地の上に散らばっていたものもあった。広東の田舎でも赤ちゃんにしか着せないものでしたが、張愛玲はわざわざその生地を上海まで持ってきて、服を作った。それを着るとまるで博物館の名画を着ているようだ、張愛玲がまわりの人々の印象や感想にはまったく無関心で、まるで、歴史骨董品を守っていたようでした。日本敗戦後、温州の田舎に隠れていた夫（胡蘭成）を訪ねた時でさえ、木綿入れの中国式の長い服を作ることを忘れてはいなかった。むろん、戦時中の安全のためとはいえ、やはり服が好きだったにちがわない。

1950年代、新中国の上海に、ある日、張愛玲が列に並んで戸籍登録する時、配給された手織りの湖色の木綿のラッパ袖の唐装と薄い紫色のキャラコのズボンを穿いていたので、戸籍登記担当の南下してきた共産党幹部に村の婦人と間違われ、張愛玲に「文字は読めますか」と聞かれたということもあった。

かつて、張愛玲は、「話が上手ではない人にとって、衣服は一種の言語であり、携帯するミニシアターである」、と言っていた。張愛玲は、自分にも、友人にも身なりにいろいろなアドバイスをしていました。友人の炎櫻と一緒にブティックを出す計画さえ練った。また、1945年5月に雑誌『天地』（第20期）に、「女装・女色」、1945年4月6日、『力報』に「炎櫻衣譜」などを書いたこともあった。1943年、ある遊園会で日本の映画スター李香蘭と出会い、一緒に記念撮影を取ったが、その時、張愛玲が着ていたワンピースは、祖母の袷刺繍をした布団表で加工したものでした。そのデザインをしたのはむろん友人の炎櫻女士でした。

1952年、張愛玲は上海を去り、香港へ行き、またアメリカに落ち着いていたが、20世紀の50年代のアメリカでは、黄色人種の女性が、ニューヨークで作家デビューすることは、とても困難でした。張愛玲が創作、出版に挫折され、傷つけられ、非常に孤独な生活を送っていたにも関わらず、平凡な生活の中にも喜びがあった。たとえば、美しい布を入手した時、香港にいる友人から衣服の生地を送られてきた時、時々友人宅での宴会に参加する時、張愛玲は大変時間をかけて着飾っていた。また、彼女は早くもコンタクトレンズを付けていた。化粧をして、華麗な服を着て出かける時の張愛玲にとって、異国生活の唯一の慰めかもしれない。

時には、母親が残してくれたストールを作り直して、宝もののように扱っていた。二度目の結婚相手のライアーは、「簡潔」「素朴」な生活理念を信奉していたが、張愛玲の服装に対する情熱に気づき、ライアーにとってそれはある種のアメリカ式の逃避だと考えていた。

晩年となっても、張愛玲は依然として、「美」を愛し続けていた。読者によりよいイメージを残すために、1993年、張愛玲は美容手術を施した。1994年金日成がなくなったその年、最後の写真が残されたが、その写真に映った張愛玲はかつらを被っていた。

衣服、ファッションが大好きな張愛玲がエッセイ「更衣記」を書いたことは、偶然ではない。それはある種の宿命的な出来事だといえる。日中戦争期という大変な時代に脚光を浴びた女性作家となり、また異国のアメリカで四十年近く過ごした張愛玲にとっては、作品を書くこと、衣服を愛することは、人生にとって両方とも欠かせないものでした。彼女が書いた「もの」、着ていた「もの」は、だれに何と言われても、張愛玲にとってはまったく関係なかった。「奇装炫人」と言われても、彼女はただ単に微笑んで何にも言わずに、なぜなら、人生は一回しかないの、人と似たような人生はごめんだと思っていたからに違わない。

張愛玲は二十世紀中国文学界においての女性作家であるだけでなく、いまでも世界中の女性にインスピレーションを与え続けている。

もし当初、代々伝わってきた衣服を大量に中古品屋に売り払っていなければ、一年に一度、きっと、六月に衣服を陽に当てるときにはとても光り輝き賑やかなことだろう。あなたが竿竹と竿竹の間を歩くと、両側は、綾絹、薄絹、縐子と緞子の壁となっている——それは、地下に埋めていた古代宮廷から発掘された渡り廊下である。あなたの顚顚

の上に錦織の刺繍を貼り付けていると、太陽がその辺りにある時には金糸が照らされ、焼け付いていたのだが、今ではもうすでに冷めている。

昔の人々は、骨が折れるような一生を送ってきた。することなすこと、だんだんとほこりに被せていた。子孫たちは衣装を日に当てるとき、また、ほこりを払い落として、黄色の太陽の中で舞い上がる。もし、思い出というものが匂いがあるのならば、きっと、樟脳の香りがして、甘くて穏当である。はっきりとした記憶が呼び覚まされる、楽しげで、甘く、茫然としていた、まるで忘れていた憂愁のようだ。

われわれは過去の世界をあまり想像できない。こんなにのろのろとして静かな、きちんとしていた——満清三百年の統治の元では、女性たちにファッションと呼べるようなものはなかった。一代また一代と、人々は同じような衣服を着て、飽きることはなかった。民国開国の時には、「男が帰順、女は不帰順」であったので、女性の衣装はまた明朝の遺風を残していた。17世紀半ばから19世紀末までには、極めて大きく広い衣服とズボンが流行っていた。ある種、極めて穏当で落ち着いている様子があり、襟は非常に低く、あってもないに等しい。外に着ているのは「大祆」¹。略式の場合、外の衣服を脱ぐと中の「中祆」²が露出される。「中祆」の中には非常に小さく体にフィットする「小祆」³がある。ベッドに行っても、脱ぐことはない。大半はなまめかしい桃色とピンク色である。三枚の祆（上着）の上にさらに「雲肩チョッキ」⁴が加わる。黒い緞子で広い縁飾り、雲状の装飾物をつけている。

肩がなでらかで、細い腰、薄く平らの胸、小柄である標準的美女は、このような一層一層の衣服の重圧の下で失踪してしまう。彼女自身は存在せず、ただの衣服の台にすぎないかのようにある。中国人は目立つ女性



をあまり支持しない。歴史上記載されている人騒がせな美德話——たとえば、知らない男に腕を引っ張られたら、その腕を切り落とさなければならぬなど——は、広く賞賛されたが、知識階級はそれに対してやや違和感を感じる。女性には過度に注目されるべきではなかったからである。たとえ、れっきとした、有名で、千万人の口にはのぼっていても、呼吸の水蒸気の中に錆びが入っているのである。女性は衆にぬきんじやうものなら、そのような堂々たる方法でも反対する人がある。奇抜な服装は、なおさらである。むろん、それは道徳にはずれた行いなのである。

出かける時にズボンの上に被っているスカートの規則は更に徹底している。通常はともに黒である。喜び事のある日（正月と節句）に夫人は赤を、第二夫人はピンクを着る、未亡人は黒いスカートを穿く。しかし、夫が亡くなって何年も経っていて、もし舅姑が未だ生きているならば、彼女は薄緑色あるいは薄紫色のスカートを穿くことができる。スカートの上の細かいプリーツは、女性の姿態に対する最も厳格な試験なのである。しつけのよい娘は小さい足で、しゃなりしゃなりと歩く。プリーツのスカートは、まったく動かないことはないけれども、もっと

も軽い揺れにだけ制限されている。スカートになれない一般庶民の家の美しい娘は、歩くとまるで強風に吹かれた荒れた海のような印象を人に与える。更に厳しいのは、新婦の赤いスカートで、その腰のところに一本一本、半寸位の幅のリボンを垂らしているものである。リボンの端に鈴が付けていて、動くときには、かすかな音しか出してはいけないのである。まるで、遠山のとっぺんにある宝塔の上にある風鈴のように。この種のスカートがやっと完全に廃棄されたのは、遅くとも 1920 年頃であろう。その頃には比較的垢抜けて自由な、幅の広いプリーツスカートが流行っていた。

毛皮を着る時には、もっとも油断してはならない。すこし、間違えれば、成金と見られてしまう。毛皮を着用には一定の季節があって、それぞれの部門やタイプごとに分か





れており、その詳細も決められている。十月の半ば、もし非常に寒い日だったら、三層皮を着るのはよいが、何の皮を着るのかは季節にかかわっているのであって、天気との関係はない。初冬は「小毛」を着る。たとえば、青種の羊、紫羊、珠羊、それから、「中毛」を着る。たとえば、銀鼠、キタリス、シマリス、狐の足の部分の毛皮、甘肩⁵、青狐⁶である。大寒の時には、「大毛」を着

る——白狐、青狐、西狐、銀狐、クロテンである。テンは、「科挙に及第して得た資格または官職のある」人物しか着ることができない。以前は中下階級の人、現在より裕福だった。だいたい金と銀を嵌め込み、あるいは羊の皮の袍子⁷を一枚もっていた。

娘たちの「昭君カバー」は陰鬱で寒い冬の日、彩りを加えていた。歴代の図画によれば、昭君が遠く異境に旅立つ際に被ったマントはエスキモー的で、簡単でおっとりしていて、ハリウッド映画スターたちの中には真似する人が非常に多かった。中国十九世紀の「昭君カバー」は軽薄でなまめかしかった。——一丁おわん帽で、帽子の周りには毛が付いており、帽のてっぺんに極めて大きな赤い綿毛の鞠が付いていた。頭の後に二本のピンクのリボンが垂れ、リボンの端に一對の金の判子が縫い付けてある。ややもすれば互いにぶつかりあって音が出る。

細部に対する過剰なこだわりは、この時期の服装の要点である。現代西洋のファッションは、必要ではない飾りがあまり多すぎ、バラエティーに富んでいないわけではないが、そのすべてに目的がある——ブルーの目が更に大いに発揚して、発達していない胸を補う。人には高くあるいは低く見えてしまうので、集中力を腰の方に集中させ、臀部の過度の曲線を消滅させる。……中国の古い衣装の上の飾り物は完全に意味のないものであり、もし純粹に、装飾という装飾以外に何かの機能性があるのであればそれはそれでいいのだが、なぜ、靴の底にまで繁縷の模様がいっぱいまきちらされていたのか。靴はもともとそれ自体、人の目に出る機会が少なかった。靴の底であればなおさらであったのか、高い底の周りにも隙間なく花模様がびっしりと詰め込まれていた。

袂子には、「三重嵌め込み、三重玉縁をつけ」「五重嵌め込み、五重玉縁をつけて」「七重嵌め込み、七重玉縁をつけ」といった違いがあり、嵌め込みと玉縁のほかにも、裾とおくみのところには、銀の糸でできた梅、菊の花がちらちらとしている。袖の上に「闌

干」という名前のシルク製のレースをつけ、約七寸の幅で、「福」「寿」の字形を透かし彫られている。

ここでは、無数の小さな面白い事柄を集めている。このように、繊細な問題を取り上げ、勝手気侭であって、事の是非は論じない。ぜんぜん関係のないことにエネルギーを浪費している。これは中国有閑階級の一貫した態度である。もっとも暇で静かな国のもっとも暇な人が、唯一このような細部の絶妙な鑑賞ができる。百種類似てはいるが重複してはいない図案が作られている。むろん、芸術と時間が必要であるが、それらを鑑賞するのも、またおなじように複雑で難しいである。

古い中国の服装のデザイナーは多分知らなかったのであろう。女は到底「大観園」ではない。あまりにも多い、積み重ねでは趣味に集中できなくなり、われわれの服装の歴史は、一口で言えば、これらの飾りものがだんだんと減少していったのである。

むろん、世の中の事はそんなに単純ではない。ウエストの大きさの交替、満ち欠けも関係がある。第一の嚴重の変化は光緒三十二、三年、当時、鉄道はもう珍しいものではなかった。列車も中国の生活の中で重要な位置を占めていた。新式の洋服は諸大商港から内地に速やかに伝わって来る。上着とズボンがだんだんと縮み、「蘭干」と幅の広い玉縁が流行遅れた時、残ったのはただ単に、一条幅のとても狭い玉縁だった。ペしゃんこな「にら」、丸い「灯草」又は、「線香」と称するふちだった。本来、中国の伝統的な服装の幅は広いものであったが、この時期からだんだんと狭くなった。それは、政治動乱と社会不正に関係している。

たとえば、ヨーロッパの文芸復興時代の洋服はたいいてい身体にピッタリとしたものであった。それは激しい活動にふさわしかったからである。中国革命が起ころうとしていた時期の中国人の服装は、十五世紀イタリア人の服装と同様で、小さく、気をつけないとほころびが出るぐらいであった。小皇帝——溥儀が帝位についた時、中国人の服装はまるで体に鞆を着けたかのようにぴったりフィットしたものであった。

中国女性のフィットチョッキの功用は実に奇妙である。——衣服がいくらきつくても、衣服の下肉体はまだリアルなものではなかった。見てもあまり女性的ではなく、まるで一首の詩の魂のようである。長衣の直線は膝まで伸びていた。下の方は重みがなく、ふわふわしていて二本の細いズボン筒が垂れている。足のようであって足ではない纏足は、すまなく軽く地を踏んでいる。鉛筆のように細いズボンの筒が一人ぼっちで人に訴えるところがなかった。中国の古詩の中に、「可愛そう」は「可愛い」の代名詞である。男性は異性を保護する嗜好があるが、端境期においては困窮の生活状況が、この傾向をさらに高めた。広い衣服、大きい袖、現在、立ち居振る舞いがきちんとして威厳のある女性たちは、あまり太ってはいけないのだということに気づいた。薄命の人になることは、彼女たちにとってかえって有利である。

それはまた、各方面から見ても極端な時代である。政治と家庭制度の欠点は突然に暴かれた。若い知識階級が伝統のすべてを敵視しながら、中国のすべてをさえ敵視している。保守性の方面も驚き恐れるのためにプレッシャーを増強させた。神経質な論争が家庭、新聞、娯楽場などで毎日進行していた。紅やおしろいをつけた新劇⁸の俳優は、妾たちの理想の恋人であって、舞台を借り、彼の結婚相手に事よせて自分の真意を述べる。時事問題を討論し声涙ともに下る。

いままでずっと心が穏やかで気持ちが落ち着いていた古い国は、今までこのような騒ぎを見たことがなかった。ヒステリックの雰囲気の中で、「元宝襟」のようなものが生まれ——鼻の先とほぼ平行になっている高さの硬い襟、まるで、ミャンマーの一層一尺ぐらいの高さに積み重ねた金属の首飾りのようである。女性たちは仕方なく、首を長く伸ばした。この怖い衣装と下半身の細い柳のような腰は完全に合っていないので、頭が重く、脚が軽かった。不均衡の性質はあの時代を象徴していた。民国が建立したばかりで、ある時期各方面にも浮いて



いる清明な気象があった。皆共にまじめにルソーの理想化の人権主義を信じていた。学生たちは熱心で誠意があるかのように非孝、自由恋愛、投票制度を擁護し、純粋な精神恋愛でさえ実験した人々がいたのだが、成功できないらしい。

服装上ではいままでにない天真、軽快、愉悅が現れた。「ラッパ袖」は、仙人が飛ぶようであって、真っ白で美しい玉のような腕が露出していた。短い袂子のウエストの部分は非常に小さかった。上層階級の女性たちは、外へ出かける時にはスカートを巻くが、うちにいるときは膝までの長さの短いズボンを穿いていた。シルクの靴下も膝のところまでで、ズボンと靴下の境を接するところは、偶然にも膝を大胆に露出し、悪い下心を持っている女性は、袂子の下から挑発的に長く幅の広く淡いシルクのズボンの紐を垂らし、紐の端に一段の穂をつけている。

民国初年のファッションの大部分のインスピレーションは西洋からのものである。襟が低くなるだけでなく、なくなったことすらある。襟が円形になったり、方形になったり、心形になったり、ダイヤモンド形になったりしたのである。白いシルクのマフラーは四季を通じて使える。白いシルクの靴下の踵に黒い花が刺繍され、まるで虫の行列である。娼婦や女給たちにとって、常に平光メガネをかけていることが美しいとされる。舶来品は分け隔てなくすべて受容された。それが何かは平凡の見当がつこうというものだ。

軍閥が行ったり来たりした馬の蹄の後には、砂が舞い上がり、石が転がる。彼らについている官僚、政府、法律がよろめいて歩き追いかけた服装は、同じようにめまぐるしく変化した。短い袂子の裾は時には丸く、時にはとがり、時には六角形となっている。往々にして昔の女性の服装は、宝石と同じように古くなることはなく、いつでも売ることができる。しかし、民国の質屋では歓迎されなかった。流行に遅れると一文の値打ちもないからである。

服装の日進月歩は必ずしも活発な精神と新鋭の思想の反映ではない。ちょうどその逆



で、活発ではないことを表している。その他の活動領域の失敗によって、すべての創造力が衣服の領域に流れ込んだのである。政治混乱の時期では、人々は彼らの生活の情勢を改良する能力がなく、彼らが創造できるのは、彼らの身近な環境——それはつまり衣服である。人々はそれぞれ自分の衣服の中に住み込んでいる。

1921年、女性たちはチーパオを着始めた。チーパオは満州の旗装が元になっており、旗人たちの入関⁹以降、ずっと中原の服装と並行し、互いに干渉し合うことはなかった。旗人の女性たちにとって、チーパオは女性美の欠落したものであったので、彼女たちは比較的なまめかしい袄子とズボンを着ることを好んだ。しかし、皇帝は詔書を下りしてこれを厳しく禁止した。五族協和の後、全国の女性たちは、突然みなチーパオを取り入れることになった。清朝に忠誠を尽くすために復辟運動を提唱するというのではなく、女性たちは男性の服装を模倣しがっていた。中国では、古くから女性の代名詞は「三緒梳頭、両截穿衣」¹⁰であり、衣服一枚着ているのと二枚着るのとでは微妙な区別があるのだ。公平でないことはないように見えていたのだが、1920年代の女性はとても気を回しやすいのだ。彼女たちは、西洋文化の薫陶を受け始めた頃、男女同権に没頭していたのだが、周りの現実と理想の距離はあまりにも遠く、その怒りの結果として、彼女たちは一切の女性化を排除し、女性たちの根性を徹底的に旧習と断絶させた。したがって、当初流行ったチーパオは厳正で方正の形であり、清教徒の風格を備えている。対内的にも対外的にも政治上において続々と発生した不幸な事件は、民衆をがっかりさせた。青年たちの理想を支持できない日はいつか来るものである。服装も緊縮しはじめ、ラッパ袖の袖口は小さくなった。1930年代では、袖の長さは腕の肘までであった、襟も高くなった。往年の元宝襟の優れた点は、



その適宜の角度で、斜めに両頬を切ったところにあった。うりざね顔ではなくともうりざね顔となった。高い襟は円筒式で、あごをきつく支えている。筋肉がまた緩くなっていなかった娘たちも二重あごとなっていた。このような襟は根本的に許せなかった。しかし、それは、十年前のあの理知化の隠逸の空気を象徴している——まっすぐな襟は女神のような頭と下半身の豊かな柔らかい肉の身とを遠く引き離れた。そこには、風刺があり、絶望の後の、もの狂おしげな笑いがある。

当時、欧米ではダブル・ボタンの軍人式ジャケットが流行っていた。これは中国人の甲高い泣き声の心情と調子がよく合う。しかし、慎むべき中庸の道を守る中国女性は雄々しく勇ましいコートの上に、地面に触れるほど長いベルベットの長衣を着ていて、長衣のスリットは太もものところまで開かれ、同じ素材の長いズボンを露出させていた。ズボンのすそところに銀色のレースが光っている。衣服の主人公もこのような奇異な組み合わせで、表面上では、激烈に高い調子で歌うのだが、その芯は未だに唯物論者である。

近年以来最も重要な変化は、袖の廃棄である（それは極めて危険な仕業であり、注意深く慎重に20年ぐらいの工夫を費やしてやっと切り取られた）。同時に襟は低くなり、長衣が短くなって装飾の意味合いのあった嵌め込みと縁取りがなくなって、花模様の手作り渦巻きボタンに替わった。しばらくして、ボタンさえもなげうって、嵌め込みボタンを使用するようになった。つまり、すべて引き算なのである。——すべての装飾品は役に立つか、役に立たないかに応じてすべて削り取り、嵌め込みボタンに代わった。残ったのは、ただ、一枚の、身体にぴったりする肌着である。首元、両腕、すねを露出させていた。

現在、重要なのは人である。チーパオの作用は、雲を塗りつぶして月をはっきりさせ、忠実に人体の輪郭、曲がった部分を描き出すほかなくなった。革命前の身なりでは、逆に人は重要ではなく、二の次である。ただ、単に詩意の線を重要視していた。したがって、女性の体格は公式化されていて、服を脱がないと、彼女たちのそれぞれ何が違うのかは分からなかったのである。

われわれの服装は、計画的、組織的な実業ではなく、すべてを独占し白人世界全体に影響する、パリのいくつか大規模な百貨店、たとえば、Lelong's や Schiaparelli's などと比べることもできない。われわれのデザイナーたちは、自己主張がなく、公衆の幻想も往々して意見や理解が、はからずも一致するにすぎないのだが、不思議に大きなトレンドが生まれ、デザイナーたちはそれを追いかけることしかできない。そうした要因もあって、中国のファッションは、更なる民意の代表となれる。

いったい誰がファッションの創始者であるのか、証明することは難しい。なぜなら、中国人はこれまで、版權、著作権といったものを尊重したことがなく、剽窃は盛大な賛



美である以上、デザイナーたちもあまり気にしなかった。最近流行っている、長くもなく短くもない袖、「四分の三の袖」は、上海人は香港で始まったというのだが、香港人は上海から伝わってきたものだ、互いに責任を擦りつけあい、だれも責任を取る勇気がない。

一対の袖がひらひらと飛んできて、形式主義の復興を兆している。最新のトレンドでは伝統的な方面へ傾いていて、細部は復興できなくとも、その輪郭は引用できる。融通が利くように使いこなせ、同じように現代における環境の需要に適応することができる。チーパオの裾にエプロン式を用いることがよい事例である。「嫁に行き三日目に厨房に入る」かのような様子がして、意味深長である。

男性の服装の近代史は、比較的平坦である。民国四年から八、九年までの非常に短い時期、男性の衣服も非常に派手になって、何度も「如意頭」¹¹の縁取りをした。男女の衣服の素材は共用することができるのだが、そのようなとき、

人々はみんな天下大乱の怪異な現象の一つだと考える。現在、中国人の洋服は、むしろ、謹厳で暗いが、西洋紳士の規定を守り、たとえ中国式の服でも、長年にわたって、グレー、茶色、紺色、この三色の中で回っており、その質も図案も非常に単調である。男性の生活は女性より大いに自由であるのだが、この一点の不自由だけでも、私は男性になりたくはない。衣服は話題にするにはあまり価値のない小さなことだ。劉備も、「兄弟は手足の如し、妻は衣服の如し」と言っている。しかし、女性が、「夫は衣服の如し」となるだけで、もう非常に大変なことである。ある西洋の作家（バーナード・ショー^マ？）は、

かつて、次のような愚痴をこぼしている。大勢の女性は、夫を選ぶより帽子を選ぶ時の方が集中し、慎重に考慮している。いくら良心などのかけらもない女性でも、「去年のあの錦織の裏地付きのチーパオ」について話をするとき、自分の感情を抑えきれないほど夢中になるのである。

18世紀に至るまで、中国と西洋の男性には、まだ赤と緑を着る権利があった。男性の服の色に対する制限は、現代文明の特徴である。むろん、心理上不健康な影響があるのかどうかは別として、これは少なからず必要のない抑圧である文明社会における集団生活の中で、必要な抑圧はたくさんある。細々したことは放任すべきで、それを償いとする。このような議論がある。男性は、もし衣服に興味があるならば、彼らはその分に安んじてしまうので、あらゆる方法で、社会の注意と賛美、自分の名声と希望を獲得するために、国と人民を苦しめるようなことをするまでには至らないであろう。男性をいくらか綺麗に美しく着飾るだけで天下が平和になる、とは、むろん笑い話である。真っ赤な蟒の刺繍をした朝服の中に刺繍の腹巻をつけた官吏も、相変わらず、朝廷の法規の是非を転倒し、黒白を混同することができる。しかし、予言者ヴールスの合理化の夢郷の中の男女公民は、一律にみな最も鮮やかな薄膜質の服とズボンとマントを着ているのだが、これも、またわれわれにとってよい参考資料となる。

習慣の関係で、男性はすこしも中国式ではない、と、見ていて実に目障りである。中式の服の上にコートを加えるというのも、一つの事例である。綿の長衣あるいは皮の長衣にはおよばない。すこしぶくぶくとなっても構わない。ある日、私は電車の中である若者を見た。学生か店員かわからないが、ベージュ色の緑のチェック



のウサギウールで、すこしきつい長衣を着ていた。女式の赤緑の縞模様の短い靴下を履き、口元には精緻な花模様を描いた偽象牙パイプをくわえ、中に煙葉はなく、彼はすこし口で吸うと、それを取り下ろし、一つひとつばらばらにして又取り付けて、再び口元に送り、吸った。その顔にはすこし得意の色があった。ちょっと見たら、可笑しいと思うのだが、しかし、なぜだめなのか？もし、彼が好きであるならば？……秋の涼しくなった薄暮の中に、市場が終わって、地面の至るところに魚のうろこや青白色のモロコシ¹²の皮とかす、ある子どもが自転車に乗り突っ込んできて、腕を見せ、大声を出してハンドルをすこし放し、揺れながら軽々と擦って行った。この瞬間に、町中の人たちは情理では分からない敬慕の念を抱く。人生がもっともいとおしいのは、その手を離れた時なのである。

1 中国式の大きい上着。

2 中国式の中ぐらいの上着。

3 中国式の小さい上着。

4 漢民族服飾文化の中に独特な服飾デザインであって、また、漢民族が外来文化を吸収し、あらゆる知識や道理を知り尽くすことによって、その全体の理解に到達し、さらに昇華して自分の民族服飾の結晶に帰したものである。中国服装史上、平面と立体設計の巧妙な構想の典型である。清朝の女性たちが着ていた上着とチョッキの肩の部分には雲の模様が非常に目立っていた。

5 不詳である。

6 倭刀は青狐の別称である。毛色が黄と黒を兼ねる。銀狐の二等の貴重である。むかし、一品官吏は銀狐、二品官吏はテン、三品、四品は倭刀を着る。

7 長衣。中国式の長い上着。ここでは、羊の皮の裏をつけた長衣のことをさしている。

8 中国の初期の新劇。1900年代初頭に上海で流行、正式な脚本はなく、既興的な部分を随時入れ替わった。

9 山海関（万里の長城の東端の町）よりも内側に入ること、中国の東北地方から中央部に入ってくることである。

10 明朝以降、漢族女性にとって、もっとも代表的な髪形である。髪を三つの髷にし、衣服を上下二枚に分けて、男のように一枚の長衣を着ない。

11 「如意」は瑞祥をシンボルとする器物であって、よく金、銀、玉、竹、象牙などによって製作される。頭部はレイシあるいは雲状を呈し、取手が曲がっている。その頭部は「如意頭」あるいは「如意結び」と称する。だいたい心形、芝形あるいは雲形である。

12 Sugar Sorghum 学名は、Sorghum bicolor である。糖高粱ともいう。